

B部門 最優秀賞 作品 No. 55

「趣味はネジ作り」

中島 麻美

33歳の誕生日に、私はネジに出会った。半年経った今、私の趣味は「ネジ作り」だ。同世代の女性の趣味としては、ちょっとシブイかもしれない。出版社に勤務する傍ら、早く仕事が終わった日や、休みの日に、近所の工房に旋盤と投影機を借りて、ネジを作ることが最近の私の楽しみになっている。

直径1.6ミリからスタートしたネジ制作も、現在は、0.7ミリまで小さくなり、時間も大幅に短縮した。愛用の時計メーカー、ジャガールクルトが1930年代に作った「コンパス」というカメラのネジを完全にコピーするのが今の目標だ。

ネジ作りを始める前も、家具の板をボルトで締めたり、取っ手がぐらぐらになったフライパンのネジを、ドライバーで締めなおしたことがらにある。けれど、いつもネジは何かを作るための「要素」でしかなく、特に気に留めたこともなかった。

きっかけは、近所のバーだ。たまたま隣に座った男性と会話をしていたとき、彼は言った。

「今日は、0.7ミリのネジを作っていたんですよ」

「えっ、そんなに小さいネジを？ どうやって作るんですか？」

彼は時計の修理職人だった。

「旋盤を使って手作りするんです。もっと小さいネジだって作れるよ」

0.3ミリのネジまでなら作る道具を揃えているという。

1ミリ以下のネジをどうやって手作りするのだろう。それに、そんなに小さいネジを見たことがない。見てみたい。

酔って気が大きくなっていたのか、彼は「いつでも工房に見学に来てください」といった。

38歳だという彼は、24歳の頃に時計の修理技術を学び始め、スイスに留学した。帰国後は時計の修理を教える学校で教師をしていたという。教えるのが好きな人なのかもしれない。

「そういえば、時計の修理をやっているのに、腕時計をしていないんですね」

「僕が欲しい時計は、僕には買えないくらい高いんだよ」

部品が全て手作りの複雑な機構の時計だと、何千万円もするものがあるのだそうだ。

「どういう時計が欲しいんですか？」

「ブレゲっていう時計職人が200年前に作った懐中時計で、時間を音で報せてくれるリ

ピーターが付いているんだ。2000万円もするんだよ。でも素晴らしい機構なんだ」

約束の日、工房に行くと、作業台の上には様々な時計がおいてあった。

「ここにある時計は全部壊れてるんですね」

「ははは。確かにそうだね。壊れてるからここに集まってくるんだよ。だからここには止まった時計しかない。時計が動き出したら、僕の手を離れてしまう」

ネジを見せてもらった。大小、20種類ほどのネジが、ケースに収まって昆虫標本のようにならんでいた。つやつやと光るネジはとてもきれいだった。

一番小さいネジだという、直径0.3ミリのネジは、砂糖粒のように小さくて肉眼ではネジ山もよくわからないほどだ。青い光をキラキラ反射していた。このネジどうやって手作りするのかも、どんなところに使うところも、私には想像がつかなかった。

「腕時計には、機械の複雑さにもよるけれど、大体20個から50個のネジが入っているんだよ」

この、0.3ミリのネジも、時計の中に入っているのだという。

ネジを作る旋盤の前に案内されると、細いスチールの棒を手渡してくれた。

「せっかくだから、ネジを作ってみたらいいんじゃない？」

スチールの棒の太さは、1.6ミリ。これなら、初心者でもいける、と言われた。

せっかく来たのだし、作ってみたら面白いかもしれない。

初めて触る旋盤で、突然のネジ作り教室が始まった。

旋盤で、ネジ山になる部分を直径1ミリまで削る。初めての旋盤操作で、水平と垂直の動かし方を間違えて何度もやり直した。

ようやく削り終わったら、こんどはネジ山を作るためのダイスを通す。スチールを噛んだダイスはとても硬くて指が震えるほど力が要るのだった。何度も手を空中でパタパタと振っては、指の筋肉を休めながら作業した。

ネジ山を何とか作ったら、こんどはネジ頭を作る。旋盤で真っすぐにネジ頭を作ったら、やすりでマイナスの溝を入れるのだ。溝を入れるのは完全にフリーハンドだ。自分の感覚で、ちゃんと真ん中に溝を入れなければいけない。やすりはなかなかネジ頭に食い込まず、しばらく苦戦した。

言葉で説明するとすごく簡単な手順なのに、たったひとつのネジをつくるのに2時間もかかった。

苦心してようやく完成したネジは、ネジ頭のマイナスの溝が少しがたがたしていたが、どこからどう見ても、「そのへんに転がっているただのネジ」だった。

「こんな大変なのに、できたのは普通のネジ……」

複雑な気持ちで言うと、彼はこういった。

「作ったのは、ネジみたいなものじゃなくて、ネジそのものだからだよ」

「でも、手作りなのに、売ってるネジと変わらなくなっちゃいましたね」

と私がいうと、彼はこう言ったのだ。

「手作り感はないから残らない。他のネジとまったく同じものができると正解なんだよ」

私ははっとした。

私の仕事は編集者だ。編集者として作家の方から毎日のように原稿を頂戴する。そこには、様々な「個性」と「自己主張」が色とりどりに散りばめられている。わたしは、モノを作ることは個性を見せることだとどこかで思っていた。

ところが、ネジは違う。ネジ山の太さや長さが、規格から外れていけば、ネジとして使えないものにならない。時計は組み上がらないし、家具の板も合わせられないし、フライパンの柄を固定することだってできない。

均一に、正しく作る。ほかのネジとまったく同じく作る。手作業の痕跡を消す、そのことが重要なのだ。

そのストイックさに感動した。

機械式の時計は、きちんと手入れをすれば、200年から300年は動き続けると、私にネジ作りを教えてくれた時計職人の彼は言う。100年前に作られた古い時計を次の世代に手渡していくために、彼は毎日時計を修理する。彼の名前はどこにも刻まれないけれど、作ったネジや部品に「自分の仕事を後世に伝えたい」という願いを託しているのだと思った。彼にとってネジや部品を作ることは「できるだけ長く、時計を働かせ続けたい」という願いそのものなのだ。

ネジはそれまで私にとってはとても地味な存在だったが、この時から、ネジに対する私の見方は変わった。一見とりつくしまもないほどの「ただのネジ」であっても、そこには、ネジを作る人たちの息遣いや、ネジ作りに対する真剣な思いを見ることができるようになったのだ。

家に帰って部屋を眺め回してみると、ネジを使われていない製品を探すほうが難しかった。テレビ、箆笥、携帯電話……。すべてのネジには、ネジを生み出した人たちの、仕事への誇りが密かに込められているのだ、と気がついた。

ネジについての本を何冊か買って読んでみた。

ネジの種類には様々なものがあることにまず驚いた。私が作ったように旋盤で手作りするネジもあれば、機械で大量生産するネジもある。ネジ頭の形も様々だ。

私が作っているマイナスネジは、現在世界ではほとんど使われていない。時計は、職人がネジ回しでひとつひとつネジを締めていくので、ドライバーの手入れがしやすいマイナスネジが主流なのだという事も知った。

ネジの市場は、国内だけで9000億円もあるということにも驚いた。非常に大きな市場だ。ちなみに私が従事する出版業界は2兆円市場といわれていたが、近年は2兆円を割り込み、とりわけ雑誌を除いた書籍の推定販売金額はこの数年、8000億円前後で推移している。

さらに、ネジには専門商社があったり、月刊誌「月刊ねじ」という専門誌まで出ている。

ネジ産業に従事する人もとても多いし、奥深く熱い世界だということがわかった。

日本で最初にネジを見たのは、1543年の種子島の人たちだということも知った。上陸したポルトガル人が持ち込んだ火縄銃を、種子島の人たちが分解して、その存在を知ったのだ。驚くべきことに、種子島の人々は、火縄銃を自分たちの手で創り上げてしまった。他国の例を見ると、火縄銃によってポルトガルやスペインなどの植民地と化してしまう大航海時代の島国は多かったようだが、日本人は火縄銃を「作る」という発想を持っていたことがすごいと思った。

こうして私はネジにはまっていった。

今では、ネジの焼入れ焼戻しもできるようになった。焼き戻したネジを、銅板とダイヤモンドの粉で磨き、ネジの頭を鏡面仕上げにする楽しさも知った。ネジとはこんなに美しいものだったのかと、自分の手で鏡面仕上げにしたネジを見るたびに思う。

当たり前といえばそうなのだが、ネジは、ネジだけでは機能しないということも、ネジを作るたびにいつも面白いと思う。ネジを受ける板や、雌ネジがあって、ネジは初めて力を発揮する。同じ形にネジを作っても、微妙にがたついたりもする。ネジを受ける素材との「相性の良し悪し」が、ドライバーを持つ手に伝わってくる。まるで人間みたいだな、と思う。

今後は、愛用の時計のネジを、自分で作ったネジにすべて交換してみたい。この挑戦を続けることで、ネジの面白さをもっと味わいたいと思っている。

